



2014年の平均気温は最高最悪 「世界終末」へ2分進み11時57分

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 平野 喬

世界の平均気温が2014年、観測以来もっとも高くなったというニュースが年明け早々の1月16日に流れました。米航空宇宙局(NASA)と米海洋大気局(NOAA)がそれぞれ発表したもので、別々の分析をしたにも関わらず結論は一緒だったということです。

NOAAの発表は、14年の平均気温は20世紀の平均気温13・9℃より0・69℃も高く、過去最高だった10年の0・65℃を上回ったとしています。また、NASAは、世界の6300か所の観測所、船舶での測定結果を分析し、世界平均気温が高かったワースト10位は、98年を除いてすべて今世紀に集中していると発表しました。

今世紀に入って、地球の温暖化は加速度的に進んでいると言わざるをえません。新聞、テレビでは小さな扱いにしかなっていませんでしたが、人類の終末が刻一刻と迫っていると受け止めた人も多かったのです。米国のケリー国務長官は「問題は科学ではない。いつどのように世界が反応するかだ」との声明を発表しました。

「終末」などと物騒な言葉を使ったのは、この発表の直後、米国の原子力科学者の組織の会報が「世界終末時計」の針を2分進めたというニュースが伝えられたからです。人類の滅亡を午前零時と定め、様々な脅威が高まるにつれてカチカチと針は進み、残り時間が少ないと世界に警告を発し続けてきたのです。かつては核開発、核拡散などが残り時間を縮めていたのですが、

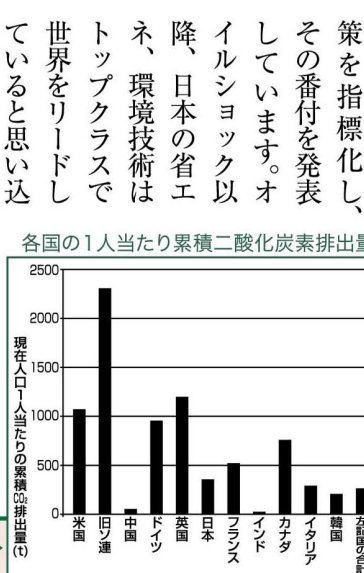
現在は地球温暖化が最大の脅威とされています。

世界終末時計が示した時刻は午後11時57分。昨年より2分も進んで残りは3分しかありません。温暖化の脅威と言え、今年の12月にはパリで気候変動枠組み条約の締約国会議が開かれ、各国が取り組む対策の新しい枠組みが決まる予定です。会議が決裂したり、温暖化を抑制するのに十分な合意しか得られない場合は、終末時計の針はまた進むこととなります。

世界の足並み乱す日本の削減?

前述のケリー長官は2年前、洪水や超大型台風に見舞われたアジア諸国を訪問した際、「気候変動は今や世界でもっとも恐ろしい大量破壊兵器と言え」と発言したことがあります。気候変動対策には後ろ向きとされてきた米国ですが、地球が温暖化しているデータを一番沢山持っているとも言われています。温暖化問題に熱心に取り組む、ノーベル平和賞を受賞したゴア元副大統領が著書「不都合な真実」の中で、米海軍が潜水艦を北極の氷の下に航行させ、水が年々薄くなっている事実を詳細に把握していると明かし、物議をかもしたことがあります。温暖化の脅威は、腰の重かった米国の指導者の共通認識になってきたのかもしれない。

ひるがえって、日本の現状はどうでしょうか。ジャーマン・ウオッチというドイツの環境NGOが気候変動パフォーマンス・インデックスという各国の温暖化防止対策を指標化し、その番付を発表しています。オイルショック以降、日本の省エネ、環境技術はトップクラスで世界をリードしていると思われている方は多いかもしれませんが、温暖化対策では後進国に位置付けられています。10年の発表では57か国中35位。1、2、3位はなくて、熱帯林の保護政策が評価されたブラジルが4位。あとはヨーロッパ諸国が上位を占めています。



各国は20年(1990年比)に向けての温室効果ガスの削減目標を発表していますが、スウェーデンやドイツは40%、イギリスは34%、EU、スイスは20%、30%、米国17%となっています。東日本大震災に見舞われたとはいえ、我が国は25%の目標を取り下げ、マイナスどころかプラスになってしまいう数字を提案しています。

「世界の足並みを乱す国」という汚名を晴らすためにも、温暖化対策に積極的に取り組む政治的リーダーの登場が待たれます。

一般財団法人 地球人間環境フォーラム
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。